

極限

alg-d

http://alg-d.com/math/kan_extension/

2018年8月23日

定義. C, D を圏, $c \in C$ を対象, $G: D \rightarrow C$ を関手とする. コンマ圏 $c \downarrow G$ の始対象を c から G への普遍射 (universal arrow) という. 即ち, 以下を満たす組 $\langle d, f \rangle$ のことである.

- (1) d は D の対象である.
- (2) f は C の射 $c \rightarrow Gd$ である.
- (3) 組 $\langle d', f' \rangle$ が同じ条件 (即ち $d' \in D$ で $f': c \rightarrow Gd'$ となる) を満たすならば, D の射 $g: d \rightarrow d'$ が一意に存在して $Gg \circ f = f'$ となる.

$$\begin{array}{ccc} c & \xrightarrow{f} & Gd \\ & \searrow f' & \downarrow Gg \\ & & Gd' \end{array} \quad \begin{array}{c} d \\ \downarrow g \\ d' \end{array}$$

双対的に, コンマ圏 $G \downarrow c$ の終対象 $\langle d, f \rangle$ を G から c への普遍射という.

$$\begin{array}{ccc} & & Gd \xrightarrow{f} c \\ & \uparrow Gg & \nearrow f' \\ d & \uparrow g & Gd' \end{array}$$

例 1. $U: \mathbf{Ab} \rightarrow \mathbf{Set}$ を忘却関手とする. 集合 X で生成される自由アーベル群を FX として自然な包含写像を $i: X \rightarrow UFX$ とする. このとき FX は以下の性質を満たす: 任意のアーベル群 A と写像 $f: X \rightarrow A$ に対して, 準同型写像 $g: FX \rightarrow A$ が一意に存在し

て $Ug \circ i = f$ を満たす.

$$\begin{array}{ccc}
 X & \xrightarrow{i} & UFX \\
 & \searrow f & \downarrow Ug \\
 & & UA
 \end{array}
 \qquad
 \begin{array}{c}
 FX \\
 \downarrow g \\
 A
 \end{array}$$

即ち, $\langle FX, i \rangle$ は $X \in \mathbf{Set}$ から U への普遍射である.

この意味で「自由アーベル群」は集合からアーベル群を構成する方法としては一番《自然》と言える. \square

例 2. C を圏として, $\Delta: C \rightarrow C \times C$ を対角関手とする. $\langle a, b \rangle \in C \times C$ から Δ への普遍射 $\langle c, \langle f, g \rangle \rangle$ が存在したとする (ここで $\langle f, g \rangle: \langle a, b \rangle \rightarrow \Delta c$ は $C \times C$ の射である). つまり, 別の射 $\langle f', g' \rangle: \langle a, b \rangle \rightarrow \Delta c'$ に対して射 $h: c \rightarrow c'$ が一意に存在して次が可換となる.

$$\begin{array}{ccc}
 \langle a, b \rangle & \xrightarrow{\langle f, g \rangle} & \Delta c \\
 & \searrow \langle f', g' \rangle & \downarrow \Delta h \\
 & & \Delta c'
 \end{array}
 \qquad
 \begin{array}{c}
 c \\
 \downarrow h \\
 c'
 \end{array}$$

これを圏の直積の定義を思い出して書き直すと, 次の可換図式になる.

$$\begin{array}{ccccc}
 a & \xrightarrow{f} & c & \xleftarrow{g} & b \\
 & \searrow f' & \downarrow h & \swarrow g' & \\
 & & c' & &
 \end{array}$$

即ち, $\langle a, b \rangle$ から Δ への普遍射とは余直積 $a \amalg b$ のことである.

同様に以下が分かる.

- $\Delta: C \rightarrow C \times C$ から $\langle a, b \rangle$ への普遍射が直積 $a \times b$ である.
- $!: C \rightarrow \mathbf{1} = \{0\}$ を一意に定まる関手として, 0 から $!$ への普遍射 $\langle c, f \rangle$ が存在とする. このとき c が始対象である. 同様に $!$ から 0 への普遍射を $\langle c, f \rangle$ とすれば c が終対象である.
- $J := \{ * \leftarrow * \rightarrow * \}$ として $\Delta: C \rightarrow C^J$ を対角関手とすれば, $(x \leftarrow z \rightarrow y) \in C^J$ から Δ への普遍射が pushout である. pullback も同様.
- 同様に, $J = \{ * \rightrightarrows * \}$ の場合が equalizer, coequalizer である. \square

定義. C を圏とする. 圏 J と対角関手 $\Delta: C \rightarrow C^J$ を取る. Δ から $T \in C^J$ への普遍射 $\langle \lim T, \pi \rangle$ を T の極限 (limit), $T \in C^J$ から Δ への普遍射 $\langle \operatorname{colim} T, \mu \rangle$ を T の余極限 (colimit) という.*¹

定義. (1) 圏 J が有限 $\iff \operatorname{Mor}(J)$ が有限集合.

(2) 圏 J が小圏 (small category) $\iff \operatorname{Mor}(J)$ が集合.

(3) J が有限の場合の極限を有限極限 (finite limit), 余極限を有限余極限 (finite colimit) という.

(4) J が小圏の場合の極限を小極限 (small limit), 余極限を小余極限 (small colimit) という.

(5) J が集合 (小離散圏) の場合の極限を小直積 (small product), 余極限を小余直積 (small coproduct) という.

(6) J が有限集合 (有限離散圏) の場合の極限を有限直積 (finite product), 余極限を有限余直積 (finite coproduct) という.

(7) C が完備 (complete) \iff 任意の小極限が存在する.

(8) C が余完備 (cocomplete) \iff 任意の小余極限が存在する.

(9) C が有限完備 (finitely complete) \iff 任意の有限極限が存在する.

(10) C が有限余完備 (finitely cocomplete) \iff 任意の有限余極限が存在する.

命題 3. \mathbf{Set} は完備である. 実際, 小圏 J と $T \in \mathbf{Set}^J$ に対して $\lim T \cong \operatorname{Hom}_{\mathbf{Set}^J}(\Delta 1, T)$ である.

証明. $j \in J$ とする. $\alpha \in \operatorname{Hom}_{\mathbf{Set}^J}(\Delta 1, T)$ を取る. $\alpha_j: 1 = \{*\} \rightarrow Tj$ が定まる. そこで $\pi_j(\alpha) := \alpha_j(*) \in Tj$ と置く. これにより自然変換 $\pi: \Delta(\operatorname{Hom}_{\mathbf{Set}^J}(\Delta 1, T)) \Rightarrow T$ が定まる. これが普遍射であることを示せばよい. その為に集合 x と自然変換 $\sigma: \Delta x \Rightarrow T$ を取る.

$$\begin{array}{ccc}
 \operatorname{Hom}(\Delta 1, T) & & \Delta(\operatorname{Hom}(\Delta 1, T)) \xrightarrow{\pi} T \\
 \uparrow f & & \uparrow \Delta f \quad \nearrow \sigma \\
 x & & \Delta x
 \end{array}$$

このとき写像 $f: x \rightarrow \operatorname{Hom}(\Delta 1, T)$ を次のように定める. $a \in x$ に対して $f(a): \Delta 1 \Rightarrow T$ を $f(a)_j: 1 \ni * \mapsto \sigma_j(a) \in Tj$ で定める. このとき $\pi \circ \Delta f = \sigma$ である.

*¹ 数学でよく出てくる射影極限 (projective limit)・逆極限 (inverse limit) は極限で, 帰納極限 (inductive limit)・直極限 (direct limit)・順極限は余極限である.

∴) $j \in J, a \in x$ に対して

$$(\pi \circ \Delta f)_j(a) = \pi_j \circ f(a) = \pi_j(f(a)) = f(a)_j(*) = \sigma_j(a).$$

逆に $\pi \circ \Delta f = \sigma$ となるような f が一意であることもわかる。故に π が普遍射であり、 $\lim T \cong \text{Hom}_{\mathbf{Set}^J}(\Delta 1, T)$ となる。□

命題 4. \mathbf{Set} は余完備である。

証明. J を小圏, $T \in \mathbf{Set}^J$ を関手とする。 $x := \coprod_{j \in J} Tj$ とする。 $a \in Tj, b \in Tk$ に対して

$$aRb \iff \text{ある } f \in \text{Hom}_J(j, k) \text{ が存在して } (Tf)(a) = b \text{ となる}$$

と定めれば、この R は x 上の二項関係を定める。 R を含む最小の同値関係を \sim として $y := x/\sim$ とおく。 $y = \text{colim } T$ であることを示す。

その為に任意の集合 z と自然変換 $\theta: T \Rightarrow \Delta z$ を取る。 $x = \coprod_{j \in J} Tj$ の普遍性により射 $h: x \rightarrow z$ が一意に延びる。

$$\begin{array}{ccc}
 Tj & & z \\
 \downarrow Tf & \searrow \theta_j & \nearrow \theta_k \\
 & x & \\
 & \dashrightarrow h & \\
 Tk & &
 \end{array}$$

このとき定義から明らかに、 $a, b \in x$ に対して「 $a \sim b$ ならば $h(a) = h(b)$ 」である。故に射 $y \rightarrow z$ が自然に定まる。□

この証明は次のように一般化される。

定理 5. 小余直積と coequalizer を持つ圏 C は余完備である。

証明. J を小圏, $T: J \rightarrow C$ を関手とする。仮定より $\coprod_{j \in \text{Ob}(J)} Tj$ と $\coprod_{f \in \text{Mor}(J)} T(\text{dom } f)$ が存在する。各 $f \in \text{Mor}(J)$ に対して $\text{dom } f = j$ となる $j \in \text{Ob}(J)$ が一意に定まるから、 $\text{id}: T(\text{dom } f) \rightarrow Tj$ により射 $p: \coprod_{f \in \text{Mor}(J)} T(\text{cod } f) \rightarrow \coprod_{j \in \text{Ob}(J)} Tj$ が余直積の普遍性に

より定まる.

$$\begin{array}{ccc}
 \coprod_{f \in \text{Mor}(J)} T(\text{dom } f) & \overset{p}{\dashrightarrow} & \coprod_{j \in \text{Ob}(J)} Tj \\
 i_f \uparrow & & \uparrow i_j \\
 T(\text{dom } f) & \xrightarrow{\text{id}} & Tj
 \end{array}$$

一方, 各 $f \in \text{Mor}(J)$ に対して $\text{cod } f = k$ となる $k \in \text{Ob}(J)$ が一意に定まるから, 射 $Tf: T(\text{dom } f) \rightarrow Tk$ により射 $q: \coprod_{f \in \text{Mor}(J)} T(\text{dom } f) \rightarrow \coprod_{j \in \text{Ob}(J)} Tj$ が余直積の普遍性により定まる.

$$\begin{array}{ccc}
 T(\text{dom } f) & \xrightarrow{Tf} & Tk \\
 i_f \downarrow & & \downarrow i_k \\
 \coprod_{f \in \text{Mor}(J)} T(\text{dom } f) & \overset{q}{\dashrightarrow} & \coprod_{j \in \text{Ob}(J)} Tj
 \end{array}$$

仮定より p, q の coequalizer $e: \coprod_{j \in \text{Ob}(J)} Tj \rightarrow x$ が存在する. $\eta_j := (Tj \rightarrow \coprod Tj \xrightarrow{e} x)$ と定める.

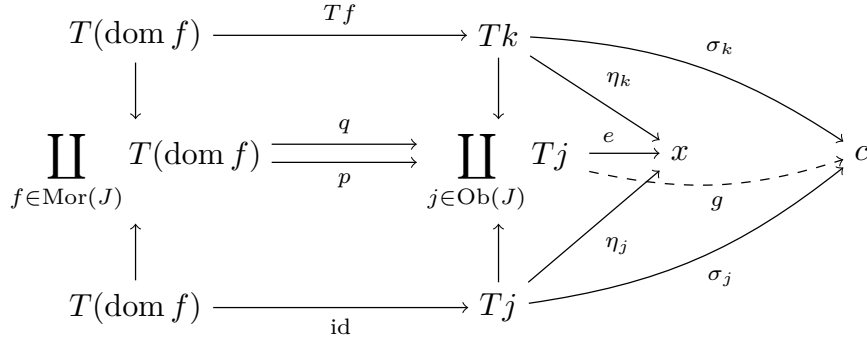
$$\begin{array}{ccccc}
 T(\text{dom } f) & \xrightarrow{Tf} & Tk & & \\
 i_f \downarrow & & i_k \downarrow & \searrow \eta_k & \\
 \coprod_{f \in \text{Mor}(J)} T(\text{dom } f) & \xrightarrow[p]{q} & \coprod_{j \in \text{Ob}(J)} Tj & \xrightarrow{e} & x \\
 i_f \uparrow & & i_j \uparrow & \nearrow \eta_j & \\
 T(\text{dom } f) & \xrightarrow{\text{id}} & Tj & &
 \end{array}$$

このとき η は自然変換 $\eta: T \Rightarrow \Delta x$ である.

\therefore) $f: j \rightarrow k$ を T の射とする. $\eta_k \circ Tf = \eta_j$ を示せばよい. まず上の図式の上半分, 下半分の可換性から $\eta_k \circ Tf = e \circ q \circ i_f$, $\eta_j = \eta_j \circ \text{id}_{Tj} = e \circ p \circ i_f$ が分かる. e が p, q の equalizer だったから $e \circ p = e \circ q$ である. 従って $\eta_j = \eta_k \circ Tf$ となる.

η が T から Δ への普遍射であることを示せばよい. その為に $\sigma: T \Rightarrow \Delta c$ を取る. こ

のとき $\sigma_j: Tj \rightarrow c$ と coproduct の普遍性から $g: \coprod Tj \rightarrow c$ が得られる.



$g \circ p = g \circ q$ である.

\therefore $f: j \rightarrow k$ を取る. g の取り方から $\sigma_j = g \circ p \circ i_f$, $\sigma_k \circ Tf = g \circ q \circ i_f$ となる. 今 σ が自然変換だから $\sigma_j = \sigma_k \circ Tf$ である. 故に $g \circ p \circ i_f = g \circ q \circ i_f$ が成り立つ. よって $\coprod T(\text{dom } f)$ の普遍性から $g \circ p = g \circ q$ である.

よって coequalizer の普遍性から $h: x \rightarrow c$ が一意に存在して $h \circ e = g$ となる. このとき

$$(\Delta h \circ \eta)_j = h \circ \eta_j = h \circ e \circ i_j = g \circ i_j = \sigma_j$$

である. よって $\Delta h \circ \eta = \sigma$ である. □

双対を考えれば次も分かる.

定理 6. 小直積と equalizer を持つ圏は完備である. □

同様にして

定理 7. 有限直積と equalizer を持つ圏は有限完備であり, 有限余直積と coequalizer を持つ圏は有限余完備である. □

$T: I \times J \rightarrow C$ を関手とする. $i \in I$ とすれば $T(i, -): J \rightarrow C$ は関手である. よってこの関手の余極限 $(\text{colim } T(i, -), \mu_i)$ を考えることができる. (ここで μ_i は自然変換 $T(i, -) \Rightarrow \Delta(\text{colim } T(i, -))$ で, 各 $k \in J$ に対して $(\mu_i)_k: T(i, k) \rightarrow \text{colim } T(i, -)$ は C の射となる.)

定理 8. 各 $i \in I$ に対して余極限 $(\text{colim } T(i, -), \mu_i)$ が存在するとき, 関手 $F: I \rightarrow C$ が一意に存在して, 以下の条件を満たす.

(1) $i \in I$ に対して $F(i) = \text{colim } T(i, -)$ となる.

(2) $(\mu_i)_k: T(i, k) \rightarrow F(i)$ が自然変換 $(\mu_-)_k: T(-, k) \Rightarrow F$ を定める

証明. $i_0, i_1 \in I, j_0, j_1 \in J, f: i_0 \rightarrow i_1, g: j_0 \rightarrow j_1$ とする. 次は可換である.

$$\begin{array}{ccc} T(i_0, j_0) & \xrightarrow{T(\text{id}, g)} & T(i_0, j_1) \\ T(f, \text{id}) \downarrow & & \downarrow T(f, \text{id}) \\ T(i_1, j_0) & \xrightarrow{T(\text{id}, g)} & T(i_1, j_1) \end{array}$$

一方次が可換である.

$$\begin{array}{ccc} T(i_0, j_0) & \xrightarrow{T(\text{id}, g)} & T(i_0, j_1) \\ (\mu_{i_0})_{j_0} \searrow & & \swarrow (\mu_{i_0})_{j_1} \\ & \text{colim } T(i_0, -) & \end{array} \quad \begin{array}{ccc} T(i_1, j_0) & \xrightarrow{T(\text{id}, g)} & T(i_1, j_1) \\ (\mu_{i_1})_{j_0} \searrow & & \swarrow (\mu_{i_1})_{j_1} \\ & \text{colim } T(i_1, -) & \end{array}$$

これらを組み合わせて次の図式の実線部を得る.

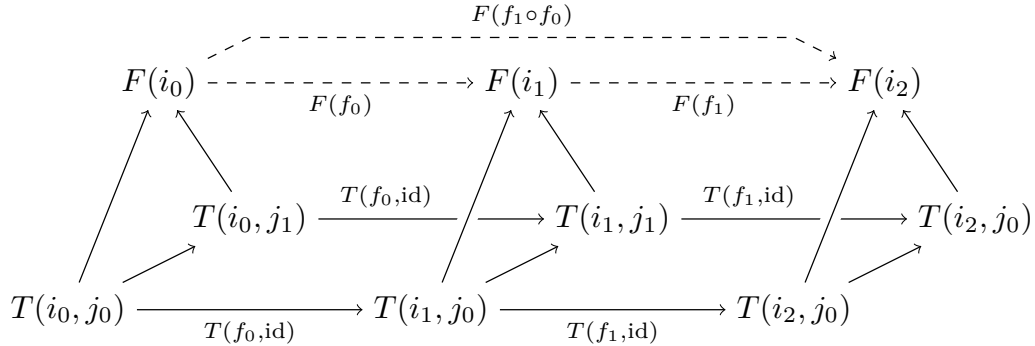
$$\begin{array}{ccccc} F(i_0) = \text{colim}_j T(i_0, j) & \overset{F(f)}{\dashrightarrow} & \text{colim}_j T(i_1, j) = F(i_1) & & \\ (\mu_{i_0})_{j_0} \nearrow & & \nwarrow (\mu_{i_0})_{j_1} & & \\ & & T(i_0, j_1) & \xrightarrow{T(f, \text{id})} & T(i_1, j_1) \\ & \nearrow T(\text{id}, g) & & & \nwarrow T(\text{id}, g) \\ T(i_0, j_0) & \xrightarrow{T(f, \text{id})} & T(i_1, j_0) & & \end{array}$$

実線部は全て可換だから, 余極限の普遍性により点線の射が得られる. これを $F(f)$ と定める. すると $F: I \rightarrow C$ は関手である.

∴ $F(f_1 \circ f_0) = Ff_1 \circ Ff_0$ と $F(\text{id}) = \text{id}$ を示せばよい.

$f_0: i_0 \rightarrow i_1, f_1: i_1 \rightarrow i_2$ を I の射とする. $F(f_0), F(f_1), F(f_1 \circ f_0)$ は次の図式

により定義されるのであった。



この図式は可換だから、余極限の普遍性により $F(f_1) \circ F(f_0) = F(f_1 \circ f_0)$ である。同様に余極限の普遍性により $F(\text{id}) = \text{id}$ も分かる。

F の定義の仕方から、 $(\mu_-)_k: T(-, k) \Rightarrow F$ は自然変換である。また余極限の普遍性から、このような F は一意であることも分かる。 \square

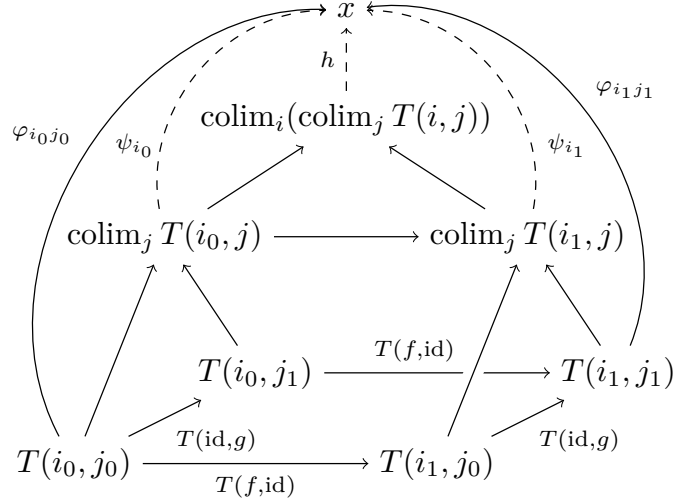
定理 8 によって得られる関手 F は $\text{colim } T(\square, -): I \rightarrow C$ とでも書くべき関手となるが、このように書いてしまうと何が何なのか分からなくなってしまう。そこで、関手 $G: I \rightarrow C$ に対して $\text{colim}_i G_i := \text{colim } G$ のように「動かす変数」を colim の添え字で表すことにすると、定理 8 で得られた関手 F は $\text{colim}_j T(-, j)$ で表すことができる。

さて、更にこの関手の余極限 $\text{colim}(\text{colim}_j T(-, j)) = \text{colim}_i(\text{colim}_j T(i, j))$ を考えられるが、一方「 i と j を同時に動かした」ときの余極限 $\text{colim}_{\langle i, j \rangle} T(i, j) (= \text{colim } T)$ を考えることもできる。

定理 9. $T: I \times J \rightarrow C$ を関手として各 $i \in I$ に対して余極限 $\text{colim}_j T(i, j)$ が存在するとする。このとき、 $\text{colim}_i(\text{colim}_j T(i, j))$ と $\text{colim}_{\langle i, j \rangle} T(i, j)$ のうちどちらか一方が存在すればもう一方も存在し、 $\text{colim}_i(\text{colim}_j T(i, j)) \cong \text{colim}_{\langle i, j \rangle} T(i, j)$ が成り立つ。

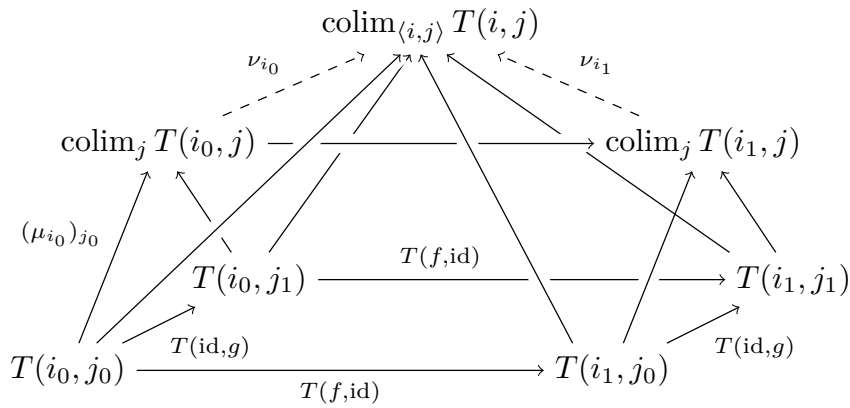
証明. $\text{colim}_i(\text{colim}_j T(i, j))$ が存在したとする。これが T の余極限となっていることを

示そう. その為に任意の自然変換 $\varphi: T \Rightarrow \Delta x$ を取る.



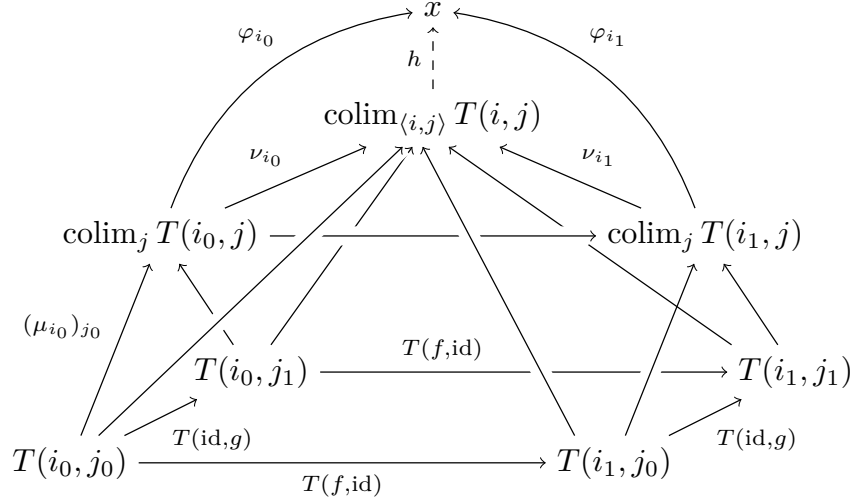
$\text{colim}_j T(i, j)$ の普遍性から, 射 $\psi_i: \text{colim}_j T(i, j) \rightarrow x$ が存在して図式が可換となる. 故に $\text{colim}_i(\text{colim}_j T(i, j))$ の普遍性から射 $h: \text{colim}_i(\text{colim}_j T(i, j)) \rightarrow x$ が存在して図式が可換となる. 普遍性から, このような h が一意であることは容易に分かる. 従って $\text{colim}_i(\text{colim}_j T(i, j))$ が T の余極限であることが分かった.

逆に $\text{colim}_{\langle i, j \rangle} T(i, j)$ が存在したとする.



余極限 $\text{colim}_j T(i, j)$ の普遍性から, 射 $\nu_i: \text{colim}_j T(i, j) \rightarrow \text{colim}_{\langle i, j \rangle} T(i, j)$ が存在し可換となる. $\langle \text{colim}_{\langle i, j \rangle} T(i, j), \nu \rangle$ が $\text{colim}_j T(-, j)$ の余極限になることを示そう. その

為に任意の自然変換 $\varphi: \text{colim}_j T(-, j) \Rightarrow \Delta x$ を取る.



するとこの図式の実線部は可換だから、余極限 $\text{colim}_{(i,j)} T(i, j)$ の普遍性により射 $h: \text{colim}_{(i,j)} T(i, j) \rightarrow x$ が存在して可換となる. このような h は明らかに一意だから、 $\text{colim}_{(i,j)} T(i, j)$ が $\text{colim}_j T(-, j)$ の余極限であることが分かった. \square

よって、(各余極限が存在すれば) $\text{colim}_i(\text{colim}_j T(i, j)) \cong \text{colim}_j(\text{colim}_i T(i, j))$ となることが分かる. 即ち、余極限の順序は交換可能である. 双対を考えれば、同様のことが極限についても成り立つことが分かる*2.

さて、再び $T: I \times J \rightarrow C$ を関手とする. このとき関手 $\tilde{T}: I \rightarrow C^J$ が得られるのであった(「自然変換・関手圏」のPDFを参照.). よってこの余極限 $\text{colim} \tilde{T} \in C^J$ も考えることができる.

定理 10. $T: I \times J \rightarrow C$ を関手として、 $j \in J$ に対して余極限 $\langle \text{colim}_i T(i, j), \mu_j \rangle$ が存在するとする. このとき $\text{colim} \tilde{T}: J \rightarrow C$ も存在し、 $j \in J$ に対して $(\text{colim} \tilde{T})(j) \cong \text{colim}_i T(i, j)$ が成り立つ. 即ちこの場合、 \tilde{T} の余極限は各点ごとに計算すればよい.

*2 一方、極限と余極限の交換については、一般には成り立たない. これについては「フィルター圏」のPDFを参照.

証明.

$$\begin{array}{ccc}
 \text{colim}_i T(i, j_0) & \xrightarrow{\text{colim}_i T(i, g)} & \text{colim}_i T(i, j_1) \\
 \uparrow (\mu_{j_0})_{i_0} & & \uparrow (\mu_{j_1})_{i_0} \\
 & \swarrow (\mu_{j_0})_{i_1} & \swarrow (\mu_{j_1})_{i_1} \\
 & T(i_1, j_0) & \xrightarrow{T(\text{id}, g)} & T(i_1, j_1) \\
 & \uparrow T(f, \text{id}) & & \uparrow T(f, \text{id}) \\
 T(i_0, j_0) & \xrightarrow{T(\text{id}, g)} & T(i_0, j_1)
 \end{array}$$

$P: J \rightarrow C$ を関手, $\nu: \tilde{T} \Rightarrow \Delta(P)$ を自然変換とする. $i \in I$ に対して $\nu_i: \tilde{T}(i) \Rightarrow P$ も自然変換である. $j \in J$ に対して $(\nu_i)_j: T(i, j) \rightarrow Pj$ となる. 次の実線の可換図式を得る.

$$\begin{array}{ccc}
 Pj_0 & \xrightarrow{Pg} & Pj_1 \\
 \uparrow \kappa_{j_0} & & \uparrow \kappa_{j_1} \\
 \text{colim}_i T(i, j_0) & \xrightarrow{\quad} & \text{colim}_i T(i, j_1) \\
 \uparrow (\nu_{i_1})_{j_0} & & \uparrow (\nu_{i_1})_{j_1} \\
 & \swarrow (\nu_{i_0})_{j_1} & \swarrow (\nu_{i_0})_{j_0} \\
 & T(i_1, j_0) & \xrightarrow{\quad} & T(i_1, j_1) \\
 & \uparrow T(f, \text{id}) & & \uparrow T(f, \text{id}) \\
 T(i_0, j_0) & \xrightarrow{T(\text{id}, g)} & T(i_0, j_1)
 \end{array}$$

よって余極限の普遍性から $\kappa_j: \text{colim}_i T(i, j) \rightarrow Pj$ を得る. これで得られた四角

$$\begin{array}{ccc}
 Pj_0 & \xrightarrow{Pg} & Pj_1 \\
 \uparrow \kappa_{j_0} & & \uparrow \kappa_{j_1} \\
 \text{colim}_i T(i, j_0) & \xrightarrow{\text{colim}_i T(i, g)} & \text{colim}_i T(i, j_1)
 \end{array}$$

は, 余極限の普遍性により可換である. 従って $\kappa: \text{colim}_i T(i, -) \Rightarrow P$ は自然変換である. このような自然変換 κ は, 余極限 $\text{colim}_i T(i, j)$ の普遍性から一意的であることが分かるから, $\tilde{T} \Rightarrow \Delta(\text{colim}_i T(i, -))$ は普遍射であり, $(\text{colim } \tilde{T})(j) \cong \text{colim}_i T(i, j)$ が分かった. \square

系 11. 圏 D が余完備ならば D^C も余完備である. 双対的に, 圏 D が完備ならば D^C も完備である. □

例 12. 圏 C に対して $\widehat{C} = \mathbf{Set}^{C^{op}}$ は完備かつ余完備である. □

例 13. $\tilde{T}: I \rightarrow C^J$ の余極限が存在したとしても, $\text{colim}_i T(i, j)$ が存在するとは限らない. 例えば $J = \mathbf{2}$ として, 圏 C を

$$a \xrightarrow{h} b \begin{array}{c} \xrightarrow{f} \\ \xrightarrow{g} \end{array} c$$

で $f \circ h = g \circ h$ を満たすものとする. $C^J = C^{\mathbf{2}}$ は C の arrow category である. $C^{\mathbf{2}}$ の次の図式を考える. (縦向きの射が $C^{\mathbf{2}}$ の対象である.)

$$\begin{array}{ccccc}
 & & & & \text{id}_c & & & & c & & \longrightarrow & c \\
 & & & & \uparrow & & & & \nearrow & & \text{id}_c & \uparrow & & & g \\
 b & \xrightarrow{f} & c & \xrightarrow{\quad} & c & \xrightarrow{\quad} & c & \xrightarrow{\quad} & c & & & & & & \\
 \uparrow & & \uparrow & & \uparrow & & \uparrow & & \uparrow & & & & & & \\
 h & & g & & f & & g & & \text{id}_c & & & & & & \\
 a & \xrightarrow{h} & b & \xrightarrow{\quad} & b & \xrightarrow{\quad} & b & \xrightarrow{\quad} & b & & & & & & \\
 & & \uparrow & & \uparrow & & \uparrow & & \uparrow & & & & & & \\
 & & h & & \text{id}_b & & g & & \text{id}_b & & & & & & \\
 & & a & \xrightarrow{h} & b & \xrightarrow{\quad} & b & \xrightarrow{\quad} & b & & & & & & \\
 & & & & \uparrow & & \uparrow & & \uparrow & & & & & & \\
 & & & & h & & \text{id}_b & & g & & & & & & \\
 & & & & a & \xrightarrow{h} & b & \xrightarrow{\quad} & b & \xrightarrow{\quad} & b & \xrightarrow{\quad} & b & \xrightarrow{\quad} & b
 \end{array}$$

この図式は pushout を与えていることが分かる. この図式で, 底面の四角が $0 \in \mathbf{2}$ 成分であるが, 圏 C において $b \xleftarrow{h} a \xrightarrow{h} b$ の pushout は存在しない. □

例 14. $\theta: F \Rightarrow G: C \rightarrow D$ を自然変換として D は余完備であるとする. このとき θ が (D^C の射として) エピ射 \iff 各 $a \in C$ に対して θ_a がエピ射である*3.

∴) 一般に, 射 $f: a \rightarrow b$ がエピ射であることは

$$\begin{array}{ccc}
 a & \xrightarrow{f} & b \\
 f \downarrow & & \downarrow \text{id}_b \\
 b & \xrightarrow{\quad} & b \\
 & & \text{id}_b
 \end{array}$$

が pushout になることと同値であった (「双対」の PDF を参照). 故に定理 10 により

*3 \iff は D が余完備でなくても成り立つ. \implies については例 13 も参照.

θ がエピ射 \iff 次の図式が pushout

$$\begin{array}{ccc} F & \xrightarrow{\theta} & G \\ \theta \downarrow & & \downarrow \text{id}_G \\ G & \xrightarrow{\text{id}_G} & G \end{array}$$

\iff 各 $a \in C$ に対して次の図式が pushout

$$\begin{array}{ccc} Fa & \xrightarrow{\theta_a} & Ga \\ \theta_a \downarrow & & \downarrow \text{id}_{Ga} \\ Ga & \xrightarrow{\text{id}_{Ga}} & Ga \end{array}$$

\iff 各 $a \in C$ に対して θ_a がエピ射.

特に, \widehat{C} の射がエピ射であるかどうかは, 全ての成分がエピ射かどうかで分かる.

双対を考えれば, モノ射についても同様であることが分かる. \square

定義. 関手 $F: C \rightarrow \mathbf{Set}$ が表現可能関手 (representable functor)

\iff ある対象 $a \in C$ と自然同型 $F \cong \text{Hom}_C(a, -)$ が存在する.

また, このとき a は F を表現するという.

※ 反変関手の場合, つまり関手 $F: C^{\text{op}} \rightarrow \mathbf{Set}$ が表現可能とは $F \cong \text{Hom}_{C^{\text{op}}}(a, -)$ と書けることになるが, $\text{Hom}_{C^{\text{op}}}(a, -) = \text{Hom}_C(-, a)$ だから, この場合は表現可能関手とは $F \cong \text{Hom}_C(-, a)$ と書けることだと思ってよい.

命題 15. 表現可能関手 F を表現する対象は同型を除いて一意である.

証明. $F \cong \text{Hom}_C(a, -) \cong \text{Hom}_C(b, -)$ とすれば米田の補題により $a \cong b$ である. \square

定理 16. $G: D \rightarrow C$ を関手として, $c \in C$ を取る. このとき

c から G への普遍射が存在する $\iff \text{Hom}_C(c, G(-))$ が表現可能関手.

証明. (\implies) $f: c \rightarrow Gr$ を普遍射とする. このとき $\text{Hom}(c, G(-)) \cong \text{Hom}(r, -)$ であることを示す.

$d \in D$ に対して $\varphi_d: \text{Hom}(c, Gd) \rightarrow \text{Hom}(r, d)$ を, $g \in \text{Hom}(c, Gd)$ に対して普遍性に

より対応する射 $r \rightarrow d$ により定める (次の図).

$$\begin{array}{ccc}
 c & \xrightarrow{f} & Gr \\
 & \searrow g & \downarrow G\varphi_d(g) \\
 & & Gd
 \end{array}
 \qquad
 \begin{array}{ccc}
 r & & \\
 & & \downarrow \varphi_d(g) \\
 & & d
 \end{array}$$

このとき φ は自然変換である. 普遍射の性質から明らかに φ は同型である.

(\Leftarrow) $\varphi: \text{Hom}(c, G(-)) \cong \text{Hom}(r, -)$ を自然同型とする. すると $\varphi_r: \text{Hom}(c, Gr) \cong \text{Hom}(r, r)$ が同型であるから, $f := \varphi_r^{-1}(\text{id}_r) \in \text{Hom}(c, Gr)$ が取れる. $f: c \rightarrow Gr$ が普遍射であることを示す.

その為に $g: c \rightarrow Gd$ とする. $\varphi_d: \text{Hom}(c, Gd) \cong \text{Hom}(r, d)$ を使って $h := \varphi_d(g) \in \text{Hom}(r, d)$ と定義する. このとき φ の自然性から次が可換となる.

$$\begin{array}{ccc}
 \text{Hom}(c, Gr) & \xleftarrow{\varphi_r^{-1}} & \text{Hom}(r, r) \\
 Gh \circ - \downarrow & & \downarrow h \circ - \\
 \text{Hom}(c, Gd) & \xleftarrow{\varphi_d^{-1}} & \text{Hom}(r, d)
 \end{array}
 \qquad
 \begin{array}{ccc}
 f & \xleftarrow{\varphi_r^{-1}} & \text{id}_r \\
 Gh \circ - \downarrow & & \downarrow h \circ - \\
 Gh \circ f & \xleftarrow{\varphi_d^{-1}} & h
 \end{array}$$

故に $Gh \circ f = g$ で, このような h は明らかに一意だから $f: c \rightarrow Gr$ が普遍射であることが分かった. \square

双対を考えれば

定理 17. $F: C \rightarrow D$ を関手として, $d \in D$ を取る. このとき

F から d への普遍射が存在する $\iff \text{Hom}_D(F(-), d)$ が表現可能関手. \square

例 18. C を圏, $\Delta: C \rightarrow C \times C$ を対角関手とすると, Δ から $\langle a, b \rangle \in C \times C$ への普遍射が直積であった. よって直積 $a \times b$ が存在すれば $\text{Hom}(\Delta(-), \langle a, b \rangle)$ は表現可能関手である. 定理 16 の証明から $\text{Hom}(\Delta(-), \langle a, b \rangle) \cong \text{Hom}(-, a \times b)$ となることが分かる. 特に $x \in C$ に対して $\text{Hom}(\langle x, x \rangle, \langle a, b \rangle) \cong \text{Hom}(x, a \times b)$ である. ここで圏の直積の定義から $\text{Hom}(\langle x, x \rangle, \langle a, b \rangle) = \text{Hom}(x, a) \times \text{Hom}(x, b)$ となるので $\text{Hom}(x, a \times b) \cong \text{Hom}(x, a) \times \text{Hom}(x, b)$ である. (故に, 直積を取る操作と $\text{Hom}(x, -)$ を適用する操作は「可換」であると言える)

逆に $\text{Hom}(\Delta(-), \langle a, b \rangle) \cong \text{Hom}(-, r)$ となるような $r \in C$ が存在するならば, 定理 16 の証明より $r \cong a \times b$ となることが分かる. また圏の直積の定義から $\text{Hom}(\Delta(-), \langle a, b \rangle) \cong$

$\text{Hom}(-, a) \times \text{Hom}(-, b)$ が分かるから、直積 $a \times b$ とは関手 $\text{Hom}(-, a) \times \text{Hom}(-, b)$ を表現する対象のことであると言える。□

今の例で、直積と $\text{Hom}(x, -)$ が交換できることは次のように一般化できる。

定義. $T: J \rightarrow C$, $F: C \rightarrow D$ を関手とし、 T の極限 $\langle \lim T, \pi \rangle$ が存在するとする。 F が極限 $\langle \lim T, \pi \rangle$ と交換するとは、 $\langle F(\lim T), F\pi \rangle$ が FT の極限となることを言う。余極限との交換も同様に定義する。

定理 19. $\text{Hom}_C(c, -)$ は任意の極限と交換する。

証明. J を圏, $T: J \rightarrow C$ を関手として、 T の極限 $\langle \lim T, \pi \rangle$ が存在するとする。 次の図式が関手 $\text{Hom}(c, T-): J \rightarrow \mathbf{Set}$ の極限を与えることを示せばよい。

$$\begin{array}{ccc}
 \text{Hom}(c, Tj) & & \\
 \downarrow Tf \circ - & \swarrow \pi_j \circ - & \\
 & \text{Hom}(c, \lim T) & \\
 \downarrow Tf \circ - & \swarrow \pi_k \circ - & \\
 \text{Hom}(c, Tk) & &
 \end{array}$$

その為に任意の $x \in \mathbf{Set}$ と自然変換 $\theta: \Delta x \Rightarrow \text{Hom}_C(c, T-)$ を取る。

$$\begin{array}{ccc}
 \text{Hom}_C(c, Tj) & \xleftarrow{\theta_j} & x \\
 \downarrow Tf \circ - & \swarrow \pi_j \circ - & \swarrow \theta_j \\
 & \text{Hom}_C(c, \lim T) & \\
 \downarrow Tf \circ - & \swarrow \pi_k \circ - & \swarrow \theta_k \\
 \text{Hom}_C(c, Tk) & \xleftarrow{\theta_k} & x
 \end{array}$$

可換性から、任意の $a \in x$ に対して $Tf \circ (\theta_j(a)) = \theta_k(a)$ である。即ち次の図式の外側の三角形が可換であり、よって $\lim T$ の普遍性から $h(a): c \rightarrow \lim T$ が一意に存在して可換となる。

$$\begin{array}{ccc}
 Tj & \xleftarrow{\theta_j(a)} & c \\
 \downarrow Tf & \swarrow \pi_j & \swarrow h(a) \\
 & \lim T & \\
 \downarrow Tf & \swarrow \pi_k & \swarrow h(a) \\
 Tk & \xleftarrow{\theta_k(a)} & c
 \end{array}$$

この $h(a)$ は写像 $h: x \rightarrow \text{Hom}_C(c, \lim T)$ を与える. 次の図式が可換になることを示せばよい.

$$\begin{array}{ccc}
 \text{Hom}_C(c, Tj) & \xleftarrow{\theta_j} & x \\
 \downarrow Tf \circ - & \swarrow \pi_j \circ - & \leftarrow \text{Hom}_C(c, \lim T) \xleftarrow{h} x \\
 \text{Hom}_C(c, Tk) & \xleftarrow{\theta_k} &
 \end{array}$$

即ち, 任意の $a \in x$ に対して $\pi_j \circ (h(a)) = \theta_j$ を示せばよいが, それは $h(a)$ の定義から明らか. 逆に, このような h の一意性も $h(a)$ の一意性から分かる.

以上により $\langle \text{Hom}_C(c, \lim T), \text{Hom}_C(c, \pi) \rangle$ が $\text{Hom}_C(c, T-)$ の極限である. □

参考文献

- [1] Saunders Mac Lane, Categories for the Working Mathematician, Springer, 2nd ed. 1978 版 (1998)
- [2] G.M. Kelly, Basic Concepts of Enriched Category Theory, Cambridge University Press, Lecture Notes in Mathematics 64 (1982), section 3.3, <http://tac.mta.ca/tac/reprints/articles/10/tr10abs.html>